

幼児の共感的相互作用による身体表現遊びの展開

遠 藤 晶
(武庫川女子大学文学部教育学科)

Development of Children's Physical Expression through Sympathetic Interactions During Play

Aki Endo

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

Bodily expression play is play, accompanied by body movements, that happens amid interactions with others. It becomes a site for the deepening of mutual communication, as the children seek to understand the intentions of others while expressing themselves through exchanges of body movements, words, facial expressions, and eye contact.

This study aims to explain the characteristics of 3-year-olds and 5-year-olds in terms of their development of bodily expression play through sympathetic interaction. By having children play with a scarf, I observed sympathetic interactions, in which fun is shared, to further expand their relationships. When prompted by one-on-one imitation, response, and synchronization, the 3-year-olds started and developed their play with a nearby partner by sharing in the fun. It became a game of lining up scarves in different colors. I observed them playing by experimenting with the scarves, jumping over them, wearing them, throwing them up in the air, and catching them with their heads and hands. In contrast, 5-year-olds developed their play by varying imitation and synchronization. They found the appropriate sense of distance for and continued their play by cooperating with a partner while assessing the surrounding situation. I observed them expressing themselves by moving the scarves around and wearing them around their waists, heads, and shoulders.

Based on my observations, it is suggested that this kind of interaction, which involves the sharing of pleasant emotions in a comfortable relationship, leads to the development of play.

問題の所在と目的

保育における身体表現の遊びでは、子ども同士の関係の中での相互交流の理解が重要になる。平成30年4月より施行される幼稚園教育要領¹⁾には、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示される。特に、教師が指導を行う際に考慮する内容として「健康な心と体」「自立心」「協同性」など10項目が記されているが、「豊かな感性と表現」の育ちを目指す幼児の身体表現の指導を考える上で、他者との関わりのなかで身体による表現を理解することがこれまで以上に重要になった。

身体表現の遊びは、身体の動きを伴い人との関わりの中で広がる遊びである。身体の動き、言葉、表情、視線を交わしながらコミュニケーションを深め、模倣、リズムや音楽に同期することなどが基盤となり展開する。身体模倣について、明和(2012)²⁾は、複雑な情報を伝達し他者とのコミュニケーション

を成功させる手段として重要であると述べ、同期については、佐藤(2016)³⁾は心がつながる機能があるとしている。また、Zamm, Wellman, & Palmer (2016)⁴⁾は、相手とリズムが合う人同士で同期が成立しやすく、より安定すると述べている。運動リズムの同期は誰とでもすぐに起こるわけではなく、相手との関係が良好な場合や相手と仲良くなりたいたいという場合に起きやすくなる。さらに、相手と動作が同期すると、自分が相手と似ているように思え、相手を思いやって相手に援助の手を差し伸べるようになること(Valdesolo & DeSteno 2011)⁵⁾、同期すると注意が相手に向き相手の言ったことをよく覚えたり相手の容姿を覚えたりすること(Macrae, Duffy, Miles, & Lawrence 2008)⁶⁾などといわれており、同期することは人との繋がりを深める体験となると考えられる。

遠藤(2016)⁷⁾は、1歳児と保育者とのふれあい遊びの観察事例から、保育者は幼児の様子を見ながら快感情に沿って関わるとより遊びが展開したことを示した。

幼児の身体表現の遊びは、模倣や同期によって発展するが、そこには快の感情が伴うと考える。快の感情は他者からの身体の動き、言葉、表情、視線を受けて生まれたり、動きの模倣や同期で身体を動かすことで生まれる。他者との関わりの中で生まれた快の感情は、他者と共有(共感)され、新たな身体表現の遊びの展開に繋がるといえる。このことから他者と身体表現の遊びの体験は、豊かな感性と表現の育ちに繋がっていくと考える。本研究では、他者との身体表現で生じた快の感情が新たな身体表現を生む一連の作用を「共感的相互作用」と呼ぶことにする。

古市(1999)⁸⁾は保育所の3歳児から5歳児の幼児を対象に風呂敷を用いた遊びを観察し、どの表現から次の遊びを誘発したかを分析した。肩に風呂敷をかけマントに見立てキャラクターになったつもりで演じることや、腰に巻きダンスをするなどの身体表現遊びに発展したことを示している。こうした遊びの発展には幼児の関わりによるものと考えられるが、関わりについての詳細な検討はされていない。Kirschner & Tomasello (2010)⁹⁾は、4歳の子どもを対象にした研究で、一緒に歌って踊って物を叩いて音を鳴らすと、自分のやりたいことを延期してでも相手を助けるようになったり、相手と協力して問題を解決したりするようになる」と報告している。他者と協力して一緒に歌ったり、踊ったりすることは4歳頃から見られると述べており、4歳前後の比較検討により共感的相互作用による身体表現の遊びの展開の特徴が検討できると考えた。

以上のことを踏まえ、本研究では、素材を表現の道具とした場合に、身体を動かして快感情の交流から生まれる他者とのやりとりつまり「共感的相互作用」によって身体表現の遊びがどのように展開するかを、3歳児と5歳児の事例から検討することを目的とする。

方 法

1 研究協力園

2017年3月に、I市幼稚園プレイルームで遊びの様子を観察を行った。3歳児は男児10名女児15名の計25名、5歳児は男児18名女児12名の計30名であった。保育観察の実施にあたっては、園長およびクラス担任に保育観察の趣旨を説明し、ビデオ撮影で得られたデータなどは個人情報の厳重な管理と適切な処理を行い、研究以外の目的には使用しないという説明をして了承を得た。

2 共感的相互作用を高める遊びの環境の検討

共感的相互作用によって身体表現の遊びが展開できる課題を考案するために、聴覚を刺激する音の出るおもちゃ、視覚と運動を刺激するスカーフ、聴覚・視覚を刺激し言葉感覚を刺激する指人形等のおもちゃを用意した。スカーフは、色や素材が子どもになじみやすい、持つ・振る等の多様な動きが誘発される、かぶったり身体に巻き付けたり身体への接触によってイメージを喚起しやすい、友達と一緒に関わる遊びにも発展できる素材であると考え、1m×1mのスカーフ5色(赤・白・黄・青・緑)10枚ずつを用意し、保育室後方に配置した机の上に置くことにした。

3 調査の方法

保育室で用意したおもちゃで自由に遊ぶ状況を設定し15分間の観察を行った。調査に際しては、保育室に入り幼児に挨拶をしてから「これから机の上におもちゃを用意します。そのおもちゃで好きに遊んでもらいます。その様子をビデオで撮りますがよろしいですか。用意ができるまで少し待っていてください。」と伝え、おもちゃを配置した。おもちゃの用意ができた後、幼児に「用意ができました。保育室のあいているところでもあそんでください。あぶない遊び方はしないでください。それではこれから15分間、よろしく願います。」と伝えて遊びの調査を実施した。調査中、担任保育者にも保育室で補助的・支援的に幼児の遊びを見守ってもらうように伝えた。幼児に対しても日常の関わりと変わらず自然な表情や頷き、幼児から要請があれば応えてもらい自然な状況で観察するようにした。

4 観察の記録と分析

観察は筆者を含む3名で行い、ビデオ2台を設置し遊びを記録した。記録したビデオを再生し、遊びはじめた子ども、布の扱い、他児との距離、身体の動き、言葉、表情の観点から記録し、一人の遊びなのか、他児の模倣か、一人の言動によって二人または小グループの中で起こったものか、やりとりについて、個人を特定して時系列に記録した。その記録をもとに一事例一文になるように記録を整理し、遊びの流れを図で示した。記録と分析は筆者が行った。遊びの記録においては、スカーフの扱いに関わる操作的なことも含まれたが、そうした行為の延長上に身体表現の遊びの発展があると考え記録し分析の対象とした。

聴覚を刺激する音の出るおもちゃ、視覚と運動を促すスカーフ、聴覚・視覚を刺激し言葉感覚を刺激する指人形等のおもちゃで遊ぶ様子を観察すると、楽しさを共有してさらに関わりを広げる「共感的相互作用」を活かした動きを伴う表現が多く見られたのはスカーフを用いた遊びであった。スカーフの遊びを対象に、以下に分析の結果を述べる。

結果と考察

1 関わり方と身体表現遊びの展開

3歳児5歳児ともに、用意されたスカーフの色や質感や大きさを確認しながら、積極的に遊びへと広げたが、3歳児のクラスでは開始後2分経過するまで机の上に置かれたままであった。初めて手にした幼児が赤いスカーフを手にしたものの、戸惑い机の上に戻したことがきっかけで参加人数が増え、スカーフのコーナーには多い時で13名が参加した。

一方、5歳児のクラスでは開始後すぐに、スカーフの遊びがはじまった。スカーフのコーナーには多い時で8名が遊びに参加した。3歳児に比べてスカーフで遊ぶ割合は高いとはいえなかったが、遊び開始直後から積極的にスカーフに近づき手に取り、かぶって近くにいる幼児に顔を近づけ、スカーフを上下に振ること、スカーフを片手で持って走ることなど動きのある関わりをはじめた。

観察された遊びについて、一人で遊んでいるのか、相手がいる二人以上の遊びをしているのかについて、事例数を年齢群で比較した(表1)。スカーフの遊びをした13名の3歳児のうち、一人の遊びは10事例、二人以上で関わった遊びは15事例見られた。5歳児の8名のうち二人以上での遊びが16事例と一人での遊びに比べて多く見られた。

二人以上で関わる遊びについて、どちらかの遊びに参加して同じ遊びをしているのか(参加)、参加だけでなく、さらに共感性を高めて遊びを変化させた状況か(展開)という観点で評定しその記録の数を比較した(表2)。3歳児

表1 スカーフ遊びの対象

	3歳児(N=13)	5歳児(N=8)
一人	10	2
二人以上	15	16

表2 スカーフ遊びの関わり方

	3歳児(N=13)	5歳児(N=8)
参加	10	5
展開	5	11

は近くにいる幼児を見て一緒に参加している状況が10事例で展開は5事例、5歳児は遊びを展開させたのは11事例と参加よりも多く見られた。以下に遊びの展開例を年齢別に示す。

(1) 3歳児の身体表現遊びの展開例

3歳児の遊びは、まず、床の上に広げたスカーフを見て、色の違うスカーフを置き並べる遊びになった。ジャンプして跳び越える、スカーフをかぶる、スカーフを投げ上げる、頭や手で受けるなど、スカーフの扱いを探る遊びに変わった。他の幼児がしている遊びに関心を持ち、同じことをやってみたい、同じようにやってみたくと至近距離にいる興味のある幼児の遊びに参加し模倣していくうちに遊びを共有していた(図1)。一人でできそうにないときは先生にスカーフをスカートのように結んでもらったり、かぶせてもらったり少し手助けを得るとまた遊びの集団に戻り、おばけの格好をして「おばけだぞー」「うらめしやー」と身体で表現する遊びに広がった(図2)。

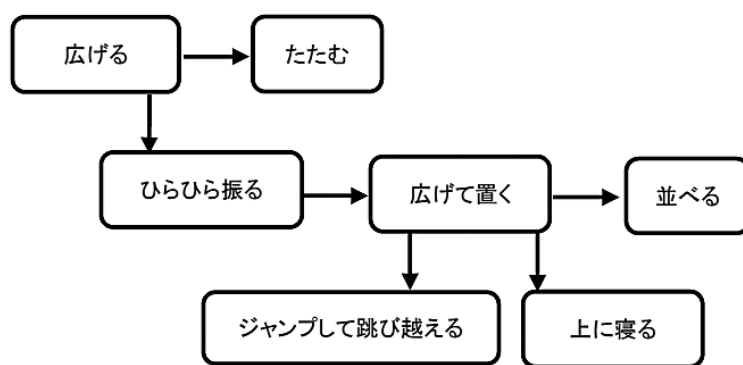


図1 広げて置いたことから並べる遊びへと変化し、広げたスカーフの上に寝る遊びに変化した

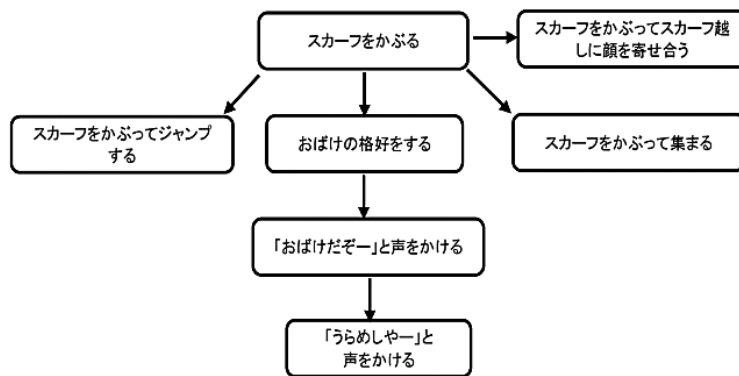


図2 二人でスカーフをかぶる遊びからお化けを表現する遊びに変化した

(2) 5歳児の身体表現遊びの展開例

5歳児の身体表現の遊びは、スカーフを片手で回し、その動きに合わせてジャンプし始めたことから始まった。布端が円を描くように回り、リズム感の高揚とともに、楽しそうな表情も増し、近くにいる幼児にもリズムが伝わっていった。スカーフを巻いたり、布の端を結んだりすることが自分のできるようになっていたため、保育者の援助がなくてもお互いの助け合いでスカーフを身に付けることができていた。腰に巻く、かぶる、回す、肩に巻くなど、スカーフの扱い方は3歳児に比べて巧みになる。扱いに困った時には、友達が手助けをしてくれて、できないことを互いに補う関係が見られた(図3)。

また、二人で遊びの発展が継続した事例である。腕を上下させスカーフを振り、ふわりと上に投げ上

げ、頭で受け止めようとするををした後、スカーフをマントのように自分の肩に掛け翻して走って戻り、頭にかぶってジャンプリズムに合わせ、赤いスカーフを丸めててるてるぼうずのような形を作ったかと思うと、重ねてスカートのように巻きくると一回りする遊びへと変化させ、二人の遊びが展開した。相手の遊びに応じて臨機応変に関われるようになるため、遊び相手が何をしていることに興味を持ち模倣し互いの遊びを少し変化させ、必要に応じて相手をサポートし、遊びを維持発展させていた。できないとあきらめかけた遊びも、共感してもらい遊びが続いた。

柳岡(2016)¹⁰⁾は、未知の出来事や様々な変化によって、「いつもと異なる」状況が生まれた時、未来の目標に向けて行動を予め変更することは5歳児頃から可能になるとしている。周りにいる幼児の遊びに合わせて自分の遊びを変更したり、「いっしょにしょ」「いくよ」と声をかけ、互いに遊びへの参加を促したりして身体で表現する遊びを変化させていた。



図3 スカートをはいた表現をするために互いに助け合う

2 共感的相互作用による身体表現の展開

二人以上の人との関わりで遊びに注目すると、幼児がスカーフを手にし、広がったり、揺れたりするスカーフの動きなどをきっかけに快の感情が伴う互いの関係によって遊びを変化させていくことが観察された。以下に事例を取り上げ、共感的相互作用によって身体表現がどのように変化するか注目して検討していく。

(1) 3歳児の事例検討

事例1と事例2は、一対一の模倣から、もう一人の幼児が加わり、三人で模倣し合うことを共有し笑い合う様子が見られた例である。

事例1 〈A児〉はスカーフをかぶり〈B児〉と向かい合っておばけの格好をする。〈B児〉も同じようにスカーフをかぶりおばけの格好をして笑った。〈C児〉も加わり三人で同じようにおばけの格好をして笑い合った。

事例2 〈D児〉が先生にスカーフをかぶせてもらう。4枚かぶせてもらって「おばけだぞー」と言いながら歩き始めた。ビデオ撮影をしている先生の前で立ち止まり、スカーフをとって「おばけだぞー」と脅かすように言う。後ろからついてきている〈E児〉にスカーフを頭にかぶせ笑う。〈E児〉も、黄色いスカーフをかぶり、〈D児〉の後ろについて歩き、笑い合った。

スカーフをかぶり、手の動きをつけ、「おばけだぞー」と言葉を添えておばけの表現をした。そして、互いにおばけになっていることを笑い合っている。相手に対して自分がふりをしていることを示す行為を、Lillard & Witherington (2004)¹¹⁾は、「ふりシグナル」と呼ぶ。大人が子どもの前でふり行動を行う時に、本当に食べているのではなく、「食べるふり」であることを誇張して顔を見たり笑顔を示したりして相手に対してふりをしていることを示すことがある。伴・内山(2015)¹²⁾は、相手に対して自分がふりをしていることを示す行為だということを2歳過ぎると理解出来るようになるというが、〈D児〉〈E児〉は互いに相手がおばけのふりをしていることを理解して、声色や動きなどを誇張しておばけに変身している自分を相手に示した。

事例3は、広げたスカーフを相手にかけてあげる幼児と、それをしてもらう立場を理解し、してあげる-してもらう関係が見られた事例である。

事例3 〈F児〉がスカーフを頭にかぶり、静かに椅子に座っている。〈G児〉が〈F児〉に近づいて、さらにスカーフを2枚、3枚と重ねた。〈F児〉はその間、〈G児〉がすることをスカーフの中から動かずじっと見ていた。〈G児〉がスカーフをかぶせ終わると、〈F児〉に「おもしろい」と声をかけ、指をさし、互いに笑い合った。

〈F児〉はかぶせてもらう間〈G児〉がすることをスカーフの中から動かず見ていた。〈F児〉が動いてしまうと、スカーフが滑り落ちてしまうかもしれない、そうになると〈G児〉が残念に思うことに気づいているようにも思える。してあげる側もしてもらう側も、相手の意図を読み取り、スカーフの枚数が増えてもまだ落ちてこないスリル感を互いに味わっていた。

事例4は、一枚のスカーフを共有して扱う遊びが生まれタイミングがぴったり合ったことを喜び合った。その状況に突然近くにいた幼児がタイミングよく遊びに加わり、タイミングを合わせることを見出した例である。

事例4 〈H児〉が黄色のスカーフの両端を持つと、〈I児〉が両手で残りの布角を持ち二人でスカーフの4角を持った。二人は勢いを付けて身体も伸び上がるほど高く両手で持ち上げ、その下に潜りこもうとした瞬間、スカーフの下に〈J児〉が潜り込んできた。三人でスカーフの中に入れた面白さや安堵感を共有し、笑顔を交わした(図4)。



図4 二人でスカーフを持ちあげる

〈H児〉が手にしたスカーフの残りの角を〈I児〉がもち、二人でスカーフを持ちあげ、続いて〈H児〉がその下に潜りこもうとするのを見て、〈I児〉が合わせて一緒に潜るといった流れで遊びが発展した。ここまでは〈H児〉が少しリードして〈I児〉が合わせる二人の遊びであったが、さらに、〈J児〉が絶妙のタイミングで参加し、三人の遊びに発展した。遊びの勢いや面白さを互いに共有し、やりたいことを変化させているようであった。スカーフの両端を二人で持つという申し合わせがあったわけではない。二人で呼吸を合わせ協力によって偶然この遊びが生まれた例である。

(2) 5歳児の事例検討

事例5は、一人の幼児がスカーフを回した動きに合わせて一緒に回していると互いに加速しすぎてリズムが合わなくなるが、合わなくなるまで一緒に回し続けられる緊張感を伴う身体の動きを互いに感じていた事例である。

事例5 〈K児〉がスカーフを片手で持ってグルグル回しジャンプする。〈L児〉も〈K児〉の動きに合わせて同じようにジャンプした。〈M児〉も加わり、三人のリズムが同期する。

〈K児〉は「一緒にしよう」と〈L児〉を誘って率先してスカーフを回し始めた。グルグル回転させてジャンプし、一緒にすることを繰り返した。〈M児〉も加わり勢いをつけて回す遊びを続けるが、誰かが動きを止めるとリズムが合わなくなり収束する。3人のうちの誰かが「いくよ」と合図して遊びをくり返した。スカーフを回すと弧を描いてカラフルな動きが見えて、視覚的な変化も加わっているようである。同じ動作を模倣しているうちに同期し、だんだんそのリズムが加速することでさらに共感性が増した事例である。

事例6は、はじめて出会ったスカーフがどのような遊びに使えるか、試行錯誤を繰り返した例である。

事例6 〈N児〉は広げたスカーフにあぐら座で乗り、スカーフを引くと前進しないものかと試し始めた。はじめはバランスを崩し座ったままの移動を中断した。〈N児〉の隣に〈O児〉があぐら座でスカーフの上に座り、スカーフ前方両端を持ち座ったまま軽く身体を浮かせると、スカーフごと前進する動きを偶然みつけた。〈N児〉も改めて〈O児〉と同じようにするとスカーフに乗って身体を移動することができるようになり、二人で乗馬を楽しむように前進する遊びを続けた(図5)。



図5 二人で乗馬を楽しむように前進する

発見した遊びがうまく行かなくても、少し修正を加えたり、その遊びが面白いことを模倣して共有してもらえたりすることで、遊びが安定する。同じようにできる遊びが共有できたことを感じた事例である。〈N児〉は、スカーフに乗るだけでは前進できずにあきらめかけたが、〈O児〉が前進できることをみつけ二人と一緒に遊べる遊びに完成した。〈N児〉が試行錯誤してできなかった遊びが、〈O児〉に少しだけ助けってもらって身体の使い方がわかり一緒に遊びができたことに喜びを感じていた。

事例7は、互いに反応を見ながら修正を加えたり遊びを補ったりして遊びが変化した事例である。

事例7 〈P児〉が、スカーフをマントのように自分の肩に掛け、跳び上がり、マントを翻して走り出した。それを見て〈Q児〉も、赤いスカーフを選びスカーフを首に巻き、走り出した。続いて〈P児〉がスカーフを頭にかぶり、ジャンプすると、〈Q児〉も頭にかぶり〈P児〉に合わせてジャンプした。〈P児〉が赤いスカーフを腰に巻いたのを見て、〈Q児〉も同じようにして〈P児〉に向かって「かわいいでしょ」という感じで両手をふった。しばらくして、〈Q児〉が赤→緑→黄→白→青とスカーフを重ねて腰に巻き少し不自由そうではあるが、先生に見せるためにゆっくりと移動し、先生に向かって視線を向け、〈Q児〉自身を指さした。〈P児〉も赤→緑→黄→白→青とスカーフを重ね、先生に向かって「見て、見て」と声をかけて自身を指さした。

〈Q児〉が〈P児〉の遊びを模倣したり、少しアレンジを加えたりして、遊びが継続した事例である。〈U児〉が模倣される側で〈Q児〉が模倣する側で、遊びの主導権が〈U児〉にあるようにも見えるが、5枚重ねたスカートを先に〈V児〉が見せて〈P児〉がその後先生に見せているので主導権が固定していたわけでもない。〈Q児〉は同じことをして、〈P児〉に向かって「かわいいでしょ」という感じで両手をふり、一緒に遊んでいる満足感も伺える。互いの意図を読み取り模倣し、遊びを補い再構築し、少しずつアレンジした二人の遊びとして継続させていた。

全体的考察

1 スカーフを用いた身体表現遊びと共感的相互作用

3歳児も5歳児もスカーフを用いる遊びに、快の感情を伴う共感的な関わりにより模倣や同期を通して身体の表現を変化させる遊びの展開が見られた。しかし、3歳児は、誰かが始めた遊びに興味を持ち遊びに参加し一対一の関わりによる遊びが見られたのに対して、5歳児は、スカーフの動きやスカーフによって引き起こされる動きを共有して二人以上で他児と関わり、相手の反応を見て新たな表現の方法を見出し展開するという結果を得た。

3歳児は相手の模倣や同期が遊びの共有のきっかけになっていた。身体表現に使える動きのバリエーションが増え、怖いことを怖いように表現する表現力も身に付いてくる。リズムによる高揚感を表現につなげることもできる。相手の表現や行動を観察し相手が面白がっていること、身体で表現している意図が読み取れるようになるため、相手の意図や志向性を理解し一緒に遊びに参加することで遊びを共有したと考える。

5歳児は模倣や同期も身体表現遊びのきっかけにはなるが、相手とのリズムを加速させるなど変化を加え関係性の中での身体の使い方を見出す遊びが見られた。スカーフの扱いが巧みになり手にしたスカーフの扱いも多様になるが、だれと一緒に共有するのか、物を巡る人との関係が重要であった。相手が試行錯誤していることを一緒にやってみるなど身体の使い方に修正をかけ互いの遊びを深めた。声をかけて誘い二人で協同して遊びを変化させ、相手とやりとりを積極的に取り込む姿勢が見られ、お互いの関係の中での遊びの変化を楽しむようになっていく。体を使った表現に勢いのある動きも出てくるので、向き合ったり、横に並んだりして、どうやったら相手と面白さが共有できるかやりとりを通して探りながら新たな身体の動きや表現の方法を提案し変化させ展開したと考える。

2 身体表現の相互作用を促す遊びの環境について

用意したスカーフは、幼児の表現的な動きとリズム性を刺激し、共感的相互作用による遊びへの参加や展開を促した。共感的相互作用を促したスカーフの役割について考えてみたい。

①手に取ってみたくなる素材

赤・白・青・黄・緑の5色を用意した。カラフルな色彩に興味をもち、触る、広げる、丸めるなど、扱い方によって形が幾通りにも変化した。透け感のある布素材のため、互いの顔が見えることも相互作用を促した。1m四方の大きさであったので、二人で持ち上げるとふわりと空気を包み込む感覚を二人で共有することができた。色・形・感触を実際に手に取って試したくなる素材といえる。

②身体の動きに置き換えたくなる素材

投げ上げるとふわりと落ちてくるスカーフに潜り込もうとする遊びも見られたが、投げた勢いとは違う速さで降りてくる感覚が楽しめた。手で持って揺らしたり回したりするとリズムが生まれ、リズムの同期性を高めた。頭にかぶってゆったり歩いておぼけになるふりをする遊びや、スカーフを腰や肩に巻いていつもと違う自分に変身する身体で表現する遊びに発展しやすい素材といえる。

③遊びの変化に対応しやすい素材

二人以上で一緒に持つことで、一人だけではできないダイナミックな動きも生み出すことができ、「せーの」という合図で「一緒に動かす」という関係も促した。臨機応変に相手の関わりによって異なる遊びを生み、友達が発信した遊びを手掛かりに遊びに工夫を加えて発展させることができる素材といえる。

以上のことから、スカーフは、互いの動きを共有しやすく、身体を動かして快感情の交流から生まれ、遊びの変化を他者とのやりとりつまり「共感的相互作用」によって身体表現の遊びが展開できる素材であったといえる。

3 今後の課題

幼児は、3歳児は近くにいる誰かの遊びに参加して関わっていくが、5歳児になると遊びに応じて、周りや相手の反応を見て遊びを進めるようになるという違いはあるが、3歳から5歳にかけて身体を動かして快の感情の交流から生まれる他者と「共感的相互作用」によって身体表現の遊びが展開できるようになることが理解できた。今回の調査は、保育時間の中で調査を実施し担任教諭のサポートを得て進めたが、初めての遊びに参加する幼児にとって保育者が遊びを見守る温かい視線と自然な関わりがあったために過度に緊張せずに参加できたのではないかと考える。

使用したスカーフが1m四方のカラフルなスカーフであったために、物の扱いを試行錯誤することから二人での関わりからの遊びが広がった。用いるスカーフのサイズが変わると関わりにも違いが見られると思われる。遊びの素材による展開の違いを理解するために調査の条件を変更したうえで検討する必要がある。今後も人と関わり表現する遊びの楽しさを体験することで、「豊かな感性と表現」の育ちにつながる幼児の身体表現の捉え方を考えていくことを課題としたい。

文 献

- 1) 文部科学省、幼稚園教育要領、(2017)
- 2) 明和政子、まねが育むヒトの心、岩波書店、p.150 (2012)
- 3) 佐藤 徳、心をつなぐ運動の同期－対人同期現象と自閉症スペクトラム障害、*発達*, **148**, 59-64 (2016)
- 4) Zamm, A., Wellman, C., & Palmer, C., Endogenous rhythms influence interpersonal synchrony., *Journal of Experimental Psychology, Human perception & Performance.*, **42** (5), 611-616 (2016)
- 5) Valdesolo, P., & DeSteno, D., Synchrony and the social tuning of compassion., *Emotion.*, **11** (2), 262-266 (2011)
- 6) Macrae, C.N., Duffy, O.K., Miles, L.K., & Lawrence, J., A case of hand waving. Action synchrony and person perception., *Cognition.*, **109** (1), 152-156 (2008)
- 7) 遠藤 晶、1歳児と保育者のふれあい遊びにおける共感的相互作用の事例研究、武庫川女子大学紀要(人文・社

- 会科学), **64**, 1-10 (2017)
- 8) 古市久子, 実践に埋め込まれた理論を抽出する試みII - 子どもの身体表現あそびを発展させる要因について -, 大阪教育大学紀要第IV部門教育科学, 第47巻2号, 343-355 (1999)
- 9) Kirschner, S., & Tomasello, M., Joint music making promotes prosocial behavior in 4-year-old children., *Evolution and human Behavior.*, **31**, 354-364 (2010)
- 10) 柳岡開地, プランニングと実行機能がスクリプトの変更方略に与える影響の発達の検討, 心理学研究, **86**, 545-554 (2016)
- 11) Lilard, A.S., & Witherington, D.C., Mother's behavior modifications during pretense and their possible signal value for toddlers., *Developmental Psychology.*, **40**, 95-113 (2004)
- 12) 伴 碧・内山伊知郎, 大人によるふりシグナルの提示は子どものふり行動を促すか?, 心理学研究, **86**, 333-339 (2015)

謝 辞

観察に協力いただきました, I市幼稚園の幼児のみなさんと先生方には, 調査のための観察の機会を与えていただきました. 心より感謝を申し上げます.

付 記

本論文は, 科学研究費補助金(基盤研究(C) 26350946)『幼児の身体表現活動における共感的相互作用の解析とその応用』(代表 遠藤 晶)による研究成果の一部である.

受稿日 2017年9月21日 受理日 2017年12月22日